〈研究論文6〉

知的直覚あるいは知的直観とそれらの発達過程についての考察

――シャフツベリと西田幾多郎の記述をてがかりに――

吉田杉子

はじめに

ヨーロッパ諸国において、十八世紀は自然神学と理神論的自由思想の時代であった。というのも、中世の教会主義の崩壊の後、ひとびとは中世の封建的階級社会から脱し、すべての人間が法の前に平等となる社会である近代市民社会の成立の時代において、個人は財産を所有する権利をもつとともに思想的自由をも獲得したからである。しかし、一方で、ひとびとの意識のなかに浸透していた宗教的敬虔さは依然として残っており、理性に代わる宗教的叡智が問われ続けてもいた。

シャフツベリは、一六七一年に生まれ、一七一三年に四二歳で没しており、彼は通常イギリス道徳感覚学派の祖であるといわれている。道徳感覚学派の思想の特徴は、人間には本来的に道徳的善悪を判定する能力が備わっており、その判定の基礎は感情に置かれているという点である。イギリス道徳感覚学派は、宗教的背景に捉われることなく、人間本性に根ざす《道徳感覚》(Moral Sense)への探求を促した。

ところで、一八七〇年(明治三年)に生まれた西田幾多郎もまた、時代の変革期に生きた思想家である。すなわち、幕藩制を廃し、中央集権統一国家と資本主義化との出発点を築いた明治維新後、欧米の学問、芸術が入り、日本の文化万般がその様式において根本的な変革を始めた時期である。それゆえ、日本に生きるひとびともまた新たな行為の規範を模索した時期であるといえるだろう。西田は、宗教とは神と人との関係であるとし、神とは宇宙の根本と見ておくのが適当であろう(二一四頁)といっているが、西田の説く知的直観という概念には、神という概念を立てる前の

より生身の人間に密着した人間と人間を超えるものの関係が窺えるのではないだろうか。西田は、知的直観とはわれわれの純粋体験の状態を一層深遠にしたものであり意識体系の発展上における大きな統一の発現である（五三頁）といっている。知的直観という概念をたどることでシャフツベリと同様に人間が本来的に備えている道徳の原理を探ることができると思われる。

筆者は、この論文において、道徳感覚あるいは知的直観という概念に注目しながら、外側からの規制から放たれた後、人間は精神的支柱をどこに見いだそうとしたかについてのひとつの考察をすることによって、人間本性に根ざした人間の普遍的性質の一端を探求する。

なお、西田の思想についてはすでにいろいろの視点からの研究がなされているが、シャフツベリの思想は今のところそれほど多く取り上げられていないので、今回はシャフツベリの思想に中心を置きながら、論を進めることにする。

一　シャフツベリの説く知的直覚

シャフツベリは、彼の倫理学的著作のなかで、道徳は宗教から分離独立したフィールドをもつものであると説いている。シャフツベリは人間も含めた宇宙全体を統べる位置に「諸事物の普遍的体系と一貫した組織」(the universal system, and coherent scheme of things) を置き、人間の根源的在り方を、この体系および組織の秩序に適うことにもとめている。彼は、世界の一切は相互にかかわりあって一定の秩序を構成していると考え、人間は本来的に自分以外の人間を配慮するという《社会的感情》(natural affection) をそなえたものであるとしている。シャフツベリによれば、善悪の観念とは、全体との対応関係に基づくものであり、全体から切り離され、個別的に存在するものの中には、善悪の観念は生じない。彼は、社会的感情へと促される独立した感覚として道徳感覚を捉えており、道徳感覚とは、全体とかかわることすなわち個体を全体の善へと導く感覚器官であることが予想される。つまり、人間は、道徳感覚によって、人間を全体的利益へと促す社会的感情へと導かれると述べている。このような道徳感覚は、感覚的に作用を促すものであるがそれは理性的成熟のうえに成立するという点が特徴的である。[1] 筆者は、西田の知的直観の概念との比較検討のため、以後、道徳感覚の概念を知的直覚の語を以て示すことにする。

さて、このような知的直覚の作用の過程は、視覚・聴覚などの五感に並ぶものとして論じられており、また、その作用は覚醒時に限定されるものではないことが以下のように記されている。

「外的感覚において、形、色、音などの種類やイメージは不断にわれわれの眼前に動いており、眠っているときでさえもはたらきかけるように、道徳的知的性質の場合においても、精神のうえに物事の形やイメージが同じように刻印を押されたもの (incum-

bent）としてある[2]」。

シャフツベリは知的直覚を人間の内面に深く根ざしたものとして捉えているが、このことに関連した見解としてテューヴェソンは、情念（passion）とは、善を知りそれを思うことに向けられた精神（soul）の意向であるというよりも、むしろ外的世界から受け取られた印象（impression）である[3]と言っている。さらにテューヴェソンは、人間の知性（intellect）は大いなる精神（"Mind"）に向けて類縁（affinity）をもつと考えており、究極の感覚には善悪の知覚はなく、情念（passion）は、人類の共同資本の摂理（joint-stock Oeconomy）による、という点から評価されなくてはいけないと述べている[4]。

また、テューヴェソンは、バーネットの「道徳感覚は発生学に類似している」という指摘をしるしており[5]、ダーウィンとシャフツベリは、人間は広範囲において本能の遺産（a large heritage of instincts）をもつという見解において顕著な一致が見られると言っている[6]。

以上の知的直覚についての諸見解を考え合わせ、筆者は、シャフツベリが知的直覚という概念を打ち出した理由つまり道徳的価値判断において、シャフツベリが感情という概念に注目した理由を以下のようにまとめる。

すなわち、シャフツベリは、善悪の判断は究極においてその根拠を提示し得ないという性質を有するものであるという点に着眼した。上に記したように、善悪の判断とは全体的視点から判断されるものであり、それは理屈による判断というよりはむしろ感覚によって導かれるものである。シャフツベリは、このような知的直覚を視覚・聴覚等の感覚器官に並んで人間が本来的に有するものであるとしているが、視覚・聴覚等の五感は通常それを機能させるための特別な訓練を必要としないが、知的直覚の適確な機能は、ある一定の訓練を経たのちに実現されるものであるという点が特徴的である。シャフツベリは、知的直覚に対応して世界も美的調和に貫かれていると言っているが、このような知的直覚の機能は美的感覚の機能に平行するものであると考えられる。このことについて、ベイトは、シャフツベリの思想において、美的領域で使用される感情はテイストであり、道徳におけるそれは道徳感覚であるが、実際この二つは根本的に同じである[7]と述べており、筆者はベイトの上の見解を支持する。シャフツベリは社会的感情を導く知的直覚はどのような吟味を経て成立するのかについてほとんど論じていない。それゆえ、筆者はテイストの概念およびその成立過程について考察することによって、知的直覚の性質を確認することは有効であると考えている[8]。

シャフツベリは、芸術家を「正当で正しいテイスト」をもつものの代表として捉えているが、その点は、西田が美術家の直覚あるいは美術の精神および芸術家の精巧なる一刀一筆と統一的あるものとの密接な関係（五四頁）について述べている内容に通じる

ものがあるのではないかと思う。

二　西田の知的直観との比較考察

西田は、知的直観を理想的なる、普通に経験以上といっているものの直覚である（五一頁）と言っており、それは一面において感覚的であるが、同時に理性的性質を併せもつものであることを述べている。西田は、知的直観と普通の知覚とは同一種のものであり、その間に明確な区分を見いだすことはできないが、知的直観は単純ではなく構成的であり、理想的要素を含んでいる（五一頁）と指摘している。

この点は、シャフツベリの説く知的直覚に等しい性質であるといえる。すなわち、双方とも、感覚的作用をもつものであるがそれは単なる受動的感覚ではなく、それはある一定の意識作用を包括しているものであると考えられる。その意識作用とは、西田が、それは現在のままを見ているだけではなく、過去の経験の力によって説明的に見ている（五一頁）といっている内容であるといえる。つまり、それは過去の一定の経験における体系的記憶の層から導きだされるものであり、感覚的作用としての知的直観がはたらく以前の段階では、様々の理性的認識あるいは現実における試行錯誤が行なわれていると考えられる。

西田は、知識と情意との一致（五九頁）という観点に触れ、疑い様のない直接の知識とは唯我々の直覚的経験の事実即意識現象についての知識あるのみである（六二頁）と言っているが、この指摘は先に述べたシャフツベリの知的感覚についてのテューヴェソンの指摘である、情念とは善を知りそれを思うことに向けられた精神の意向であるというよりもむしろ、外的世界から受け取られた印象である、という記述を想起させる。西田もシャフツベリも感覚による判断を「印象」という語をもって示してはいないが、筆者はこのテューヴェソンの見解は、西田およびシャフツベリ双方の思想の核心を適確に突いたものであると考えている。

すなわち、繰り返しになるがテューヴェソンは、人間の知性は大いなる精神にむけて類縁をもつと考えており、究極の感覚には、善悪の知覚はなく、情念は人間の共同資本の摂理による、という点から評価されなくてはいけないと記述していたわけであるが、西田の知的直観も上に述べたものに等しい作用があると考えられる。西田は、普通の知覚が単に受動的と考えられているように、知的直観もまた単に受動的観照の状態と考えられている。しかし真の知的直観とは純粋経験における統一作用そのものである。知的直観といえば主観作用のように聞こえるのであるが、その実は主客を超越した状態である（五四頁）と言っているが、これは部分が全体において調和的であるか否かという「印象」の伝達であるといえるのではないか。

三　知的直覚あるいは知的直観の発達過程について

以上、知的直覚あるいは知的直観についてをシャフツベリと西田の記述をてがかりとして考察してきたが、それらの発達過程という点から今まで述べてきたことを総括し、結びにかえることにする。

シャフツベリの倫理思想は、感情によって人間の到達すべき最終目標を定義しているが、そのような感情が調和を保つためには《練習》(exercise)が必要であると言っている。感情における練習とは、感情という主観的側面に根ざした機能によって導きだされる価値判断に現実生活における他者の見解を導入し、それを、社会における複数の視点によって吟味することであると考えることができる。それゆえ、知的直覚によって導きだされる感情は練習によって絶えず磨かれていかねばならないものであり、その限りにおいて知的直覚は、経験の中で発達していくものであるといえる。すなわち、それは歴史的な過程を反映することも要素に入れながら発達していくと考えられる。

また、以下の西田の記述から、知的直観は「経験」によって発達し得るものであることがわかる。

「始めは経験できなかった事または弁証法的に漸くに知り得た事も、経験の進むに従い直覚的事実として現われてくる。」(五二頁)

西田は知的直観とは、純粋経験の状態を一層深く大きくしたものであり、それは意識体系の発展上における大いなる統一の発現である(五三頁)が、ある人の超凡的直覚が単に空想であるか、はた真に実在の直覚であるかは他との関係(傍点、吉田)即ちその効果如何に由って定まってくる(五二頁)と記述している。すなわち、知的直観も「経験」というある種の吟味を経て方向性を獲得するものなのである。

上に述べてきたように、知的直覚あるいは知的直観とは常に発達過程にあるものであると考えられる。そのことから筆者は、それらの究極的意義は、人間を常に他者との関係あるいは人間を超えたものとの吟味へとたちかえらせることにあるのではないかと思う。テューヴェソンは、われわれは自分自身の感情から、正しい行為がどうあるべきか知っている。われわれは、教えられるというよりもむしろ、自分自身を観察することで示唆される(inspire)のであると[9]記述しているが、シャフツベリにおいても西田においても自己以外の人間の視点による自己観察という視点が導入されているであろうことが重要である。しかし、自己と他者の関係は明確に区切られておらず、双方において自己のなかに主観的自己と客観的自己が同時に存在すると考えられていると見受けられる点がある。主観は客観になりえるのかという点に明確な答えはだされていないという点は依然問題点として残る。

また、シャフツベリの知的直覚はその発達の基礎に相互主観的

な要素が置かれているのに対して、知的直観の発達の基礎はあくまで各個人の直観的観照にあるという点が窺える。筆者は現時点において、このことについて詳細に論述するだけの準備はないが、この点を視野に入れることによってそれらの性質のもつ新たな側面を見いだせる可能性がある。

以上の問題点を残してはいるが、筆者はシャフツベリあるいは西田によって説かれた知的直覚あるいは知的直観は、人間が本来的に備えた性質をあらたに引き出して認識すると同時に、宗教的背景を欠いた人間の社会を調和的に導くための道徳概念の構築に一つの切り口を与えたという点で評価されるべきであると考えている。知的直覚あるいは知的直観の作用は自己を内省へと導き、それによって自己は他者とのつながりを回復すると考えることができるのである。

＊西田幾多郎『善の研究』岩波文庫からの引用は、頁数のみを記した。

(1) シャフツベリは、感情のはたらきを気質 (temper) と精神 (mind) の二層から成るとし、前者を主観的性質を有するもの後者を客観的性質を有するもの、として捉えている。

(2) Shaftesbury, A. A. C., *Characteristics of Man, Manners, Opinions, Times,* (1711), Georg Olims Verlag Hildesheim, New York, 1978 II-p.29.

(3) Tuveson, E., *Shaftesbury on the Not So Simple Plan of Human Nature,* Studies in English Literature,1961, (以下 SEL と略) p.422.

(4) SEL, *ibid.,* p.419.

(5) Tuveson, E., *The Origins of the 'Moral Sense',* Huntington Library Quarterly 1937, p.247.

(6) SEL, *op. cit.,* p.431.

(7) Bate, W J., *From Classic to Romantic,* HARPER & BROTHERS, New York 1961, p.51.

(8) シャフツベリは、《テイスト》の創造および形成段階における《批評》(criticism) の重要性を示している。彼は、芸術家の特徴として、人間の情念 (passion) の境界に敏感であり、美を醜から、快を不快から区別できることをあげており、芸術家は、《自己との対話》を経たのちに《公平無私な境地》(disinterestedness) による美的価値判断が展開されることを示している。シャフツベリは芸術と道徳の近親性を指摘し、道徳的価値判断の究極に「神への公平無私な愛」(disinterested love of God) を置いている。シャフツベリにおいて、《テイスト》を通して美の享受 (enjoyment of beauty) へと導かれる最終段階は、《公平無私な境地》によってなされるものであるとみなすことができ、芸術家にはこの判断基準を設定することがもとめられている。

しかし、シャフツベリの分けた美の三段階のなかで、芸術家は「第二の製作者」(second Maker) と呼ばれており、芸術家は美の第二段階に位置する。このことから、芸術家は際限なく第三段階の判断の享受へと接近し得る存在であると考えられ、芸術家は美の第三段階の源泉と密接な関係をもつが、常に自己の美的価値判断の基準を多角的に検討し続けなければならないという位置にあると考えられる。

このような《テイスト》の性質に照らし合わせて知的直覚である《道徳感覚》の性質を考慮した場合、知的直覚もまた全く完全な道徳的判断を導くものではない、と考えることができる。知的直覚もまた、人間を含めた宇宙全体を善へと導く判断に際限なく接近しようとする感覚器官であることが予想される。

(9) SEL, ibid., p.422.

(よしだ・すぎこ、倫理学・イギリス道徳哲学、
お茶の水女子大学大学院)